

令和元年度薬学部 FD 研究会報告

小川法子（文責）、井上 誠（委員長）、徳本真紀、山本清司、巽 康彰、
神野伸一郎、武井佳史、安池修之、古野忠秀、村木克彦

愛知学院大学薬学部 FD 委員会

令和元年度薬学部 FD 活動としては、研究授業（「疾患病態学Ⅰ」：加藤宏一教授、令和元年10月2日）、第1回 FD 講演会（「健全な研究活動(Good Research Practice)とは？」田中智之先生（京都薬科大学病態薬科学系薬理学分野教授）、令和元年11月22日）、第2回 FD 講演会（「入学者の現状と背景分析～教科書内容の変遷と高校ヒアリングから考察する～」麻柄真治先生（株式会社ナガセ（東進ハイスクール）上級執行役員、令和2年1月16日）、FD・SD ワークショップ（「教職協働で学修成果を向上させるためにー6年間の学びを可視化するー」をメインテーマとして、第1回「教職協働で取り組む、6年間の学びの可視化ーe-ポートフォリオをどのように活用するかー」、2月14日）を実施した。FD・SD ワークショップ第2回として「学生の学習意欲を喚起する初年次教育ー薬学部の現状に即してー」を令和2年3月6日に企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止した。また、全学 FD 研究会が「キャンパスでのハラスメントを予防するために」をテーマに、令和元年10月30日に実施された。薬学部では、欠席した教職員に資料を配布し、教職員のハラスメントに対する理解を深めた。

研究授業

研究授業は、10月2日2限「疾患病態学Ⅰ」（3年生対象）（加藤宏一教授）にて行われ、多くの教員が参加した。本年度の研究授業は、「薬学専門教育スキルの習得」をテーマに行われ、講義は、パワーポイントで作成したスライドをプリントアウトして学生に配布し、スクリーンにも上映しながら進められた。講義終了後に23名の教員がアンケートに回答し、その後の情報交換会には12名が出席し、授業の実施状況や効果の高い教育法等についての活発な意見が出された。

アンケートの設問に対する回答は以下のとおりである。

設問1. 授業の構成や進め方について

- ・冒頭でその日に行うことのまとめの説明があつて良かった。
- ・導入のアイスブレイクが良かった。
- ・身近な事例を紹介していて良かった。
- ・最新の研究データを提示していて良かった。
- ・学生の講義への集中度が高そうな印象であった。
- ・情報が多く進行が速かった。
- ・進行が速く、成績が上位層の学生にとっては良いが、付いていけない学生もいるのではないかと。

設問2. 情報の提供（スライドや配布資料）について

- ・スライドが分かり易い。
- ・スライドが復習しやすい作りになっている。
- ・学生に書き込ませる形式になっている方が良い。
- ・今回の配布資料はモノクロ印刷であったが、カラー印刷の方が良いのではないかと。しかしモノクロだと逆に学生の自発性を促す効果があるかもしれない。
- ・スライドの背景もマウスのカーソルも白色であったため指している場所が分かり難かった。

設問3. その他気付いた点

- ・教室が暑かったため学習意欲の低下に繋がる可能性がある。
- ・メモを取る学生が少なかったが、その分集中して聞いていた。
- ・略語についてはフルネームも紹介したほうが良い。

設問4. 情報交換会で話したいこと

- ・授業の進行速度の調整方法について知りたい。

以上のアンケート結果を元に、情報交換会で議論した議題および意見は以下の通りである。

議題1. 学習カリキュラムについて

今回の講義内容である糖尿病について、2年生の秋学期および3年生の春学期にて薬の作用機序を主体とした内容の講義で履修済みであり、その後に臨床の病態について3年生の秋学期に疾患病態学Ⅰで学習する流れとなっている。

議題2. 「薬の作用機序」と「臨床病態」のどちらを先に履修するのがより良いのか

- ・学生が聞きたいのは薬の話であるため、薬理作用の講義が先行している現在の流れが良いのではないか。
- ・講義間で内容が重複している部分もあるかもしれないが、教員間での講義内容のすり合わせが不十分であるのが現状である。今後、重複している部分をどちらかに統一して省力化するのが良いか、同じ内容を繰り返し扱うことで学生の知識の定着を図るのが良いか、検討すべき課題である
- ・対象の学年によっても、講義を聴講する姿勢が異なる。つまり、学年が上がるにつれ真剣さが増すと思われることも併せて今後の課題である。

議題3. スライドや扱う内容の量について

- ・今回の講義において、全体の量が多いが、学生には配布資料の下線を引いてある部分をテストに出題することを事前に情報提供してあり、下線以外の部分は学生の理解を助けるために加えられている。
- ・過去には、配布資料に下線を引いておらず、講義を進めながら学生に線を引いてもらう形式で行ったこともあるが、学生からの評判が良くなかった。
- ・内容が多いため、進行は速くならざるを得ない。
- ・スライドの量が多いため、配布資料をカラー印刷すると費用が嵩んでしまう。

議題4. 講義の進行速度について、ペース配分の指標があれば知りたい

- ・各々の教員が独自でペース配分しているのが現状である。
- ・学生に理解してもらえるように、ペース配分を改善しながら取り組むことが重要である。

まとめ

- ・スライドの作成が参考になった。
- ・学生に下線やマーカーを引いてもらったり配布資料に記入してもらったりしながら講義を進めるのが良いのか否かは適宜選択するのが良いと思われる。

・複数の講義で内容が重複することがあっても対象の学生によってはそれでも良いかもしれない。しかし、学部内全体で話し合う機会を設けることも検討する。

・講義室内は座る場所によって温度が異なり、今後改善することが必要である。

第1回 FD 講演会

「健全な研究活動(Good Research Practice)とは？」

令和元年11月22日に炎症・アレルギー領域を専門とした第一線の研究者であり、実験科学に従事する研究者の立場から研究校正の推進に取り組まれている、京都薬科大学病態薬科学系薬理学分野教授の田中智之先生をお招きして、「健全な研究活動 (Good Research Practice) とは？」というタイトルで実施した。教職員、学生が研究倫理や生命倫理に関わる知識や考えを学ぶ貴重な機会となった。薬学部教員30名、歯学部教員10名、事務職員2名、学生11名の参加があった(主催:薬学部、薬学研究科FD委員会、共催:歯学部、歯学研究科FD委員会)。

第2回 FD 講演会

「入学者の現状と背景分析～教科書内容の変遷と高校ヒアリングから考察する～」

令和2年1月16日に株式会社ナガセ(東進ハイスクール)上級執行役員の麻柄真治先生をお招きして、「入学者の現状と背景分析～教科書内容の変遷と高校ヒアリングから考察する～」というタイトルで講演をお願いした。現在の高校教育と今後の大学教育の課題について講演をいただいた。薬学部教員31名、歯学部教員27名、教養部教員4名、事務職員3名の出席があった(主催:薬学部FD委員会、共催:歯学部FD委員会)。

FD・SD ワークショップ

本年度は、「教職協働で学修成果を向上させるためにー6年間の学びを可視化するー」をメインテーマとしてFD・SDワークショップを開催した。第1回ワークショップは、「教職協働で取り組む、6年間の学びの可視化ーe-ポートフォリオをどのように活用するかー」をテーマに、6年間の学生の学修成果を可視化し、教職協働で取り組むための態勢をいかに作るのかについて事務職員の参加も呼びかけてワークショップ

を行った。「学修成果の見える化の意義」について講演をしていただいた後、「e-ポートフォリオに何を入れるか」について各班で行った。薬学部教職員 38 名が参加した。

第 2 回ワークショップは、「学生の学習意欲を喚起する初年次教育 –薬学部の現状に即して–」をテーマに、3 月 6 日の実施を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止した。以下に各ワークショップの概要等を記載する。

第 1 回 FD・SD ワークショップ

「教職協働で取り組む、6 年間の学びの可視化 –e-ポートフォリオをどのように活用するか–」

第 1 回ワークショップは、成田秀夫先生（大正大学教授）を講師に招き、2 月 14 日（金）に行われた。本ワークショップは、6 年間の学びを可視化する意義を理解し、e-ポートフォリオを活用して、教職協働で取り組むためのポイントを理解することを目的として開催し、38 名の教職員が参加した。

本ワークショップでは、以下の 4 点を目標とした。

- ①学修成果の可視化の意義を理解する。
- ②e-ポートフォリオのメリットとデメリットを理解する。
- ③e-ポートフォリオに記入するデータについて共有する。
- ④教職協働で学びと成長を支える態勢のあり方について共有する。

1) 概要

愛知学院大学薬学部においては、「豊かな人間性と生命の尊厳について深い認識を持ち、医療を協働の場として人々の健康維持と医療の発展に積極的に貢献し、共創を通じて未来を開拓する医療薬学専門人の養成」を教育理念・目標とし、「1. 人々の健康維持と医療の発展に携わる者として求められる教養、倫理観とコミュニケーション能力を身に付けていること。2. 薬学分野における基礎的・専門的知識ならびに技能と態度を修得していること。3. 自己研鑽能力とともに、科学的思考力・実践能力・問題解決能力を身に付けていること。」の 3 つのディプロマ・ポリシーを制定している。

昨年度の FD 研修会では、ディプロマ・ポリシーがどの程度達成されているかを評価する指標のひとつである「ループリック」の作成について、その基本的な意義や方法についての共通理解を得るためのレクチャーとワークショップを行った。

本年度の研修においては、昨年度までの成果を踏まえつつ、2020 年度から導入される e-ポートフォリオの活用と初年次教育の充実をテーマに、2 回の開催を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大を受け、e-ポートフォリオの活用をテーマにした 1 回だけの開催となった。

タイムテーブル

時間	概要
13:00 (70 分)	1) オリエンテーション ・ 前回の研修の振り返り ・ 今回の概要説明と目的、目標の確認 2) レクチャー「学修成果の見える化の意義」 ・ 大学に求められる学修成果の「質保証」 ・ 質保証を実現するためのアセスメント・ポリシー ・ 成績評価における「履修」と「修得」 ・ ポートフォリオとは一メリットとデメリット ・ ポートフォリオを活用した学修支援 ・ e-ポートフォリオの利便性と課題
14:10 (20 分)	3) ワークショップ「e-ポートフォリオに何を入れるか」
14:30	・ e-ポートフォリオ担当者からの提案 ・ e-ポートフォリオの使い方
休憩 (20 分)	
14:50 (70 分)	4) ワークショップ (グループ) ・ 学びと成長を可視化するために必要なデータは何か？ ・ e-ポートフォリオを教職協働で運用するためになにをどのようにすれば良いのか？ ・ 導入のための課題整理
16:00	
休憩 (20 分)	

16 : 20 (30分)	5) 課題の共有化 ・グループの検討結果のシェア ・全体で課題の共有化
16 : 50	6) リフレクション
17 : 00	終了

2) レクチャー「学修成果の見える化の意義」

レクチャーは本研修の講師である成田秀夫先生（大正大学教授）によって、次のように行なわれた。

1. 大学に求められる学修成果の「質保証」

レクチャーの冒頭で、令和2年1月22日に答申された、中央教育審議会大学分科会「教学マネジメント指針（以下、指針）」について触れ、今まで以上に、3つのポリシーに基づく教育質保証が求められていること、特に学位プログラム共通の考え方や尺度を明確にした「アセスメントプラン」を作成することが求められていることを確認した。本学科では3つのポリシーを策定し、教育成果を測定するための学科共有の評価項目を策定し、また、それら进行评估するための基準となるルーブリックも導入している。

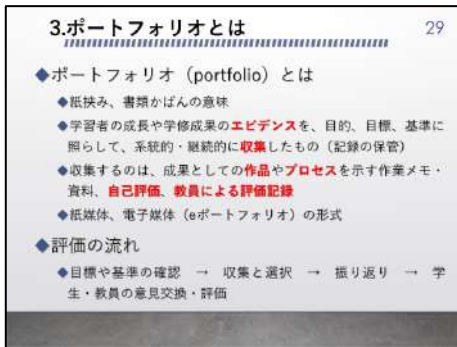
従って、「指針」で述べられている「共通の考え方や尺度」については一定の成果を有していると言える。

しかし、「指針」においては「教育成果」と「学修成果」を分けて考えることを提案している。つまり、「教育成果」とは、大学が定めた教育目標を組織としてどれだけ達成できているかが問われるものであるのに対して、「学修成果」とは、学生自身が自らの学修の到達度を理解し活かせるようにしているかという違いがあるということである。従って、大学は、今まで以上に学生個々の学修状況を丁寧に把握すると同時に、学生が自らの学びを振り返り、現状を自覚して学修を自己調整できるようにする配慮が必要になっている。個々の学生の状況を把握し的確に支援するためには、「学修状況の見える化」が必要であり、そのための有効なツールとして「学修ポートフォリオ」に対する期待が高まっている。

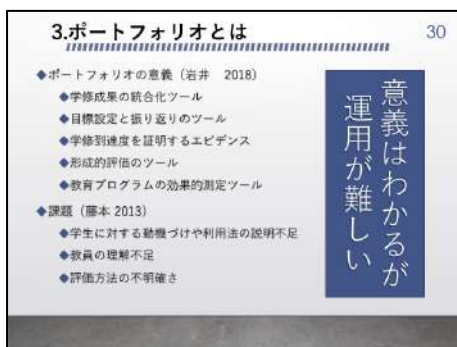
2. 質保証を実現するアセスメント・ポリシー

「指針」で提唱されている「アセスメントプラン」とは、学生の学修成果の評価（アセスメント）について、その目的、学位プログラム共通の考え方や尺度、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針のことであるとされている。こうした指針は今までアセスメント・ポリシーと呼ばれることが多かったものであり、このこと自体は目新しいものではないが、教学マネジメントを進めるうえで求められているPDCAサイクルを実効性のあるものにするためには、Checkすなわち評価を抜きに考えられないという大前提を強調していると考えられる。この点は、まさに本学科が進めてきた教学マネジメントの現段階と同じ到達点であると言えるだろう。本学科が2020年4月からe-ポートフォリオを導入しようとしていることは、まさに時期を得たものである。

3. ポートフォリオとは-メリットとデメリット-



ポートフォリオ (portfolio) とは、もともと「紙ばさみ、書類かばん」といった意味であり、画家が画商に自らの作品を示すときなどに用いられていたものであるが、大学教育では「学生が授業で作成したレポートや論文、課題達成のために収集した資料や成績表などの学修成果と、学修の過程において学んだ点や気付いた点などを記録していくものです。学期毎に自分が履修した授業の記録を残し、学期末に自分自身の成長を振り返って来学期の目標を立てるといように活用したり、大学における学修の記録をすべて残しておく、大学で何を学んだか、そのときにどのようなことを考えたかなどを振り返ることで、就職活動のときに、自分自身を振り返るために活用されます」（日本私立学校振興・共済事業団「大学ポートレート（私学版）」2020年2月14日閲覧 https://www.shigaku.go.jp/p_dic_t011.htm）といった意味で用いられている。

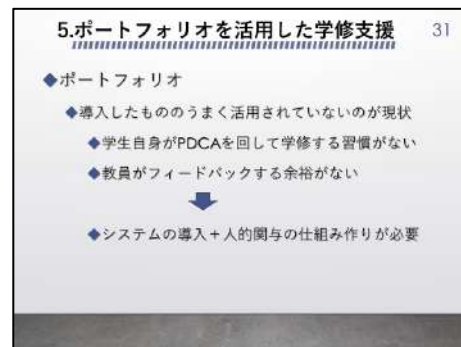


先行導入している大学においては、成果と同時に課題も報告されている。

岩井（2018）は、ポートフォリオの意義として「目標設定と振り返りのツール、学修到達度を証明するエビデンス、形成的評価のツール、教育プログラムの効果的測定ツール」などを挙げている一方で、藤本(2013)は、「学生に対する動機づけや利用法の説明不足、教員の理解不足、評価方法の不明確さ」などの課題を指摘している。つまり「意義はわかるが運用が難しい」というのが現状である。

4. ポートフォリオを活用した学修支援

こうした現状を打破するためには、e-ポートフォリオのシステムを導入するだけではなく、学生と教職員双方に向けた丁寧な説明が必要であると同時に、e-ポートフォリオのシステムと連動した「人的関与の仕組み作り」が必要である。当日はこうした観点から進められている大正大学のe-ポートフォリオについて講師から報告があった。



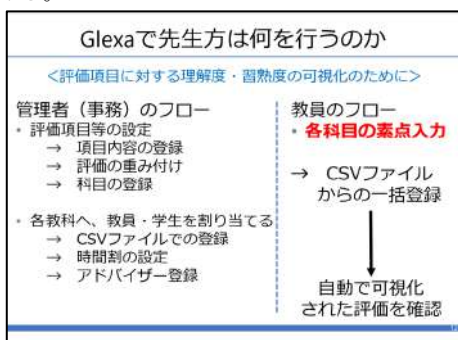
3) ワークショップ「e-ポートフォリオに何をを入れるか」

次に、本学科でe-ポートフォリオの導入を検討しているプロジェクトを代表して巽康彰准教授から、本学のe-ポートフォリオについての説明があった。

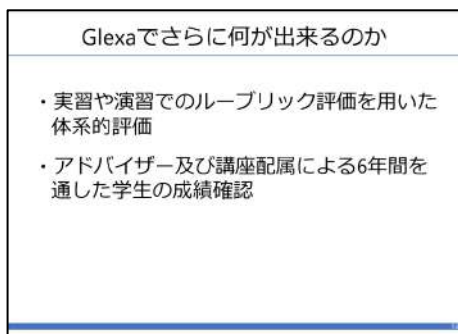


本学科で e-ポートフォリオを導入する目的を一言でいえば「6年間の教育の体系的な評価」ということになる。

「6年間」を「定型的に」評価するという際に、体系的に配置された科目を担当する教員が教育成果について評価するだけでなく、課外活動をはじめとした6年間の大学での活動を含めると職員との連携は不可欠となる。その意味では、本学科が進める e-ポートフォリオの導入は、単なるシステムの導入にとどまらない、教職の連携を促すものであることを確認しておく必要がある。



本学科で導入が決まっている e-ポートフォリオは「Glexa」である。Glexa は汎用的なシステムであるが、本学科の e-ポートフォリオとしても利用可能なシステムである。



そこで、Glexa では、事務サイドから評価項目などを設定してもらい、各科目毎に教員・学生を割り当て、評価するための前提的な情報を入力する。教員はそれを基に、ルーブリックやテスト等で学生を評価した「素点」を入力し、学生の学修状況を成果の観点から自動で可視化し、その評価を確認した上で、次の指導に活かしていくことになる。

さらに、実習や演習でのルーブリック評価を用いた体系的評価や アドバイザー及び講座配属による 6年間を通した学生の成績確認を体系的に行うことで、継続的・組織的な学修成果の可視化が実現できる。

この後、異准教授が担当する科目を実例にして Glexa の活用の仕方をデモンストレーションした。

4) ワークショップ（グループ）

レクチャーと本学科に導入される e-ポートフォリオの説明を踏まえ、課題を抽出し解決策を考えるワークショップを行った。8グループ（4～5名/1グループ）に分かれて、①学びと成長を可視化するために必要なデータは何か？②e-ポートフォリオを教職協働で運用するために何をどのようにすれば良いのか？③導入のための課題整理について話し合っ、プロダクトを作成した。

5) 課題の共有化

今回の研修を通して、次のような課題が明らかになってきた。

- ① 入学前―入学後―卒業後を一体的に評価できるのは、学生の成長を長いスパンで確認できるので、体系だった教育ができる反面、情報の管理・運用の面で労力が増えるのではないかと不安がある。
- ② システムを入れることで情報が可視化され、課題が共有化されるという面もあるが、導入にコストをかけないと十分な成果が得られないのではない。コストをそこまで掛けられるのか。
- ③ パーソナルな情報を扱うので、個人情報保護の観点からも検討が必要である。
- ④ こうした課題は、e-ポートフォリオ導入後の継続的に検討することが必要なものである。

6) リフレクション

研修終了後、参加者から多くの感想・コメントが寄せられた。以下に一部抜粋して紹介する。

感想・コメント（一部抜粋）

・e-ポートフォリオとはどのようなもので何の目的で行うのかをはじめ、具体的な内容や方策を理解することができた。

・e-ポートフォリオを取り入れる上で、学生・教員・事務職員の負担を考慮することはとても重要であり、“使える”システムにするためには、更に議論が必要であると思った。

・ワークショップでは各班から非常にユニークなシステムや今後の課題が多く提言された。多くの教職員が集まって提案されたものであるため、是非、新しいシステムに取り入れていただき、学生にとってより良いシステムの構築につなげてほしい。

第2回ワークショップ

「学生の学習意欲を喚起する初年次教育－薬学部の現状に即して－」

第2回ワークショップは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止した。

【総括】

今年度も薬学部FD活動として、1回の研究授業、2回の講演会、1回のワークショップを実施し、それぞれに多くの教員が積極的に参加した。特に、ワークショップには積極的な参加がみられ、教職協働で学びと成長を支える態勢のあり方をはじめとする今後の課題について、共通認識を持たせたと考えられる。薬学部FD委員会では、これらの取組みを通じて、薬学部の全入学生に対して、多様な視点から高度な医療人専門教育を推進するサポートを進めていく。